

CONTENTS

	ページ
巻頭言 - 医療ミス - (附属図書館長 佐藤 章夫)	1
雑誌の動き	2
ILL (文献複写依頼) が Webでできるようになりました	2
統計で見る図書館サービス	3
新着図書案内	5
編集後記	

医療ミス

附属図書館長

佐藤 章夫

最近、大病院の医療ミスに関する報道が目につく。医療ミスは最近になって増えたのか。そんなことはない。発言する患者や遺族が多くなったからだ。

もう、25年も前のことになるが、母親がくも膜下出血で某大学病院に入院した。手間のかかる患者だったので、付き添いを要求された。家内が勤めを止め、病院に泊まりこんだ。私も毎日病室に通った。病室は6人部屋で、横並びの3ベッドが2列、対面する形で置かれていた。自分で食事のできる患者はベッドに座って配られた飯を食う。母親はベッド上ですべての用をたしていた。ベッドとベッドの間に1mほどの隙間があった。付き添いはこの隙間を利用して寝泊まりする。昼間は簡易ベッドあるいは一枚のたたみをベッドの下に押し込み、夜が更けると引っ張り出して自分の寝床にしていた。この病室で、第三者の目で患者、医師、看護婦や医療を垣間見た。

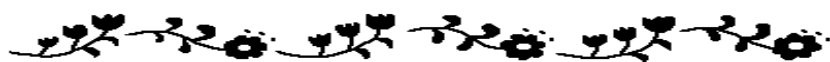
母親と相部屋の患者はみんな元気だった。病人が元気というのはおかしいが。女性患者はよく喋った。病名は白血病、慢性肝炎、バンチ症候群などであったが、みんな明るく振る舞っていた。真夜中にすすり泣きを何度も聞いたが。入院が長くなると、付き添いも患者と仲良くなってお喋りに加わる。看護婦も加わる。医者のおわさ話がほとんどだ。ところで、当時の医者ってのは本当に不愛想でしたな。「吸血鬼」というあだ名の若い医師はバンチ患者の血液をよく抜いていた。「腕出して」以外の日本語は知らないようであった。きっと、バンチの素晴らしい治療法を研究していたのだろう。このバンチ患者はプレドニンを飲んでいて。看護婦が「ご飯のあとでこれ飲んでね」と白い錠剤を渡す。バンチは「これ服むと顔が丸くなってしまふのよ」と言って、錠剤を二つに割って片方を飲み、もう一方は紙に包んで床頭台の引き出しに入れていた。看護婦は忙しくて服んだかどうか確認する暇はなさそうだった。1錠では効果がないと考えたのだろう、「吸血鬼」は錠剤を二つに増やした。1.5錠が引き出しに保管された。

私もときどき付き添い食（患者の普通食）を食べた。「一汁一菜に香の物」である。冷たい味噌汁が出てくるのでびっくりした。炊きたてのメシに冷たい味噌汁をかけたぶっかけメシは私の好物だが、それも叶わなかった。「美味しいものを食べたかったら早く退院しなさいってことよ」とバンチは言っていた。（山梨医科大学病院の食事は美味しい。私は2年前に検食なる仕事を1年間仰せつかったが、一流レストラン並みの味だった。検食用に特別の食事を作っているのではないかと尋ねて栄養室長の阿佐美さんをびっくりさせたこともある。ウナギの蒲焼きにメロンがついたこともあるんですよ。この食事なら入院も悪くないと感心したものだ。塚原病院長、入院期間を短縮するには食事を不味くするっていう方法もありますね）。「オレにも不味いんだから、病人ののどは通らなくて当たり前だ」と同情した。時間がくると看護婦はさっさと下膳する。忙しくて食器の中を覗いている暇はなさそうだった。きっと、大学病院ではくすりや点滴が大切に食事なんかどうでもいいことなのだ。（そういうことなんですよ、阿佐美さん、困りましたね。）食事をほとんど残してしまうので、ベッドの上だけの生活でもお腹が空く。「やむを得ず」だと思ふ、患者はしょっちゅう買い食らいをしていた。アイスクリーム、餡パンなどだ。それに

加えて、家族や見舞い客が病人の好物を持って来る。病院ではろくな食事が出ないと知っているからだ。（山梨医科大学病院では、あんなに美味しい食事を残して買い食いするなどという不届きな患者はいないでしょうね、婦長さん。）

ある中国からの留学生は「日本の病院きれい、器械すばらしい、お医者さんと看護婦さんやさしい」という。ただ、彼に心配なことが一つある。「お医者さんの処方するくすり、もらうくすり同じどうか分からない」と言うのだ。「くすりの色変わる、ときどきある」そうだ。薬剤師に尋ねたら「色違って、成分同じ」と言われたという。中国の薬剤には「目ぐすり、服みぐすり、くすりの名前、効きめ、副作用、みんな書いてある」から安心だと言うのだ。「日本の薬品は優秀で副作用がないから、間違ったくすりを服んでも心配はいらないんだ」と答えておいた。彼は目を剥いた。きっと、私の「論理的な回答」に感服したのだ。（この答えでいいんですよね、中島新一郎先生。）

医療ミスの種は、そちら、こちら、意外なところどころがっている。



雑誌の動き

誌名変更

Journal of midwifery & women's health v.45 (2000) - 図書館
(Formerly: Journal of nurse-midwifery)

Journal of nursing scholarship v.32 (2000) - 図書館
(Formerly: Image: journal of nursing scholarship) 人間・基礎看護学
臨床看護学

ILL（文献複写依頼）がWebでできるようになりました

これまで、学外への文献複写の申込は、「文献複写申込書」による申込みだけ受付けていましたが、5月1日より図書館のホームページからも教職員と院生に限り、申込みが出来るようになりました。5月1日から12日にかけて1日3回開催した説明会も、多くの方に受講していただきました。

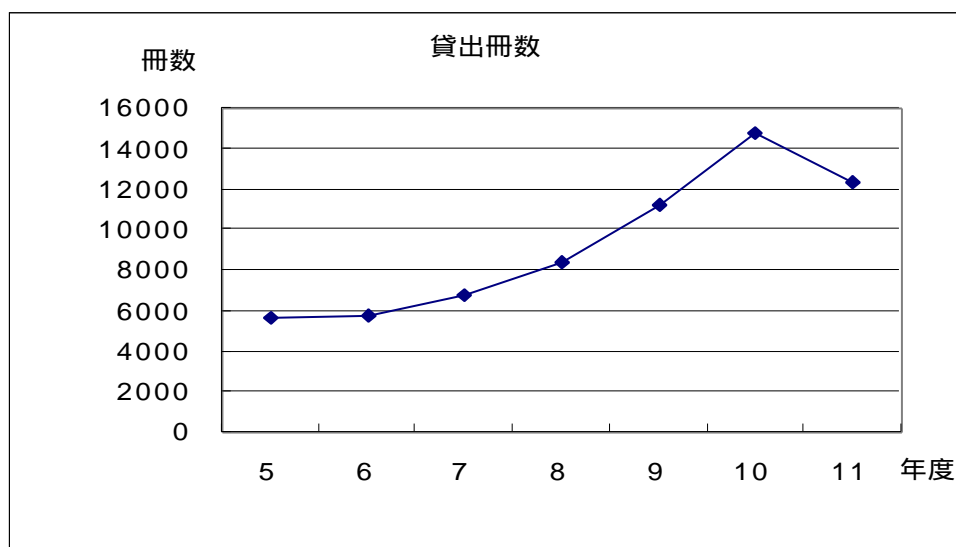
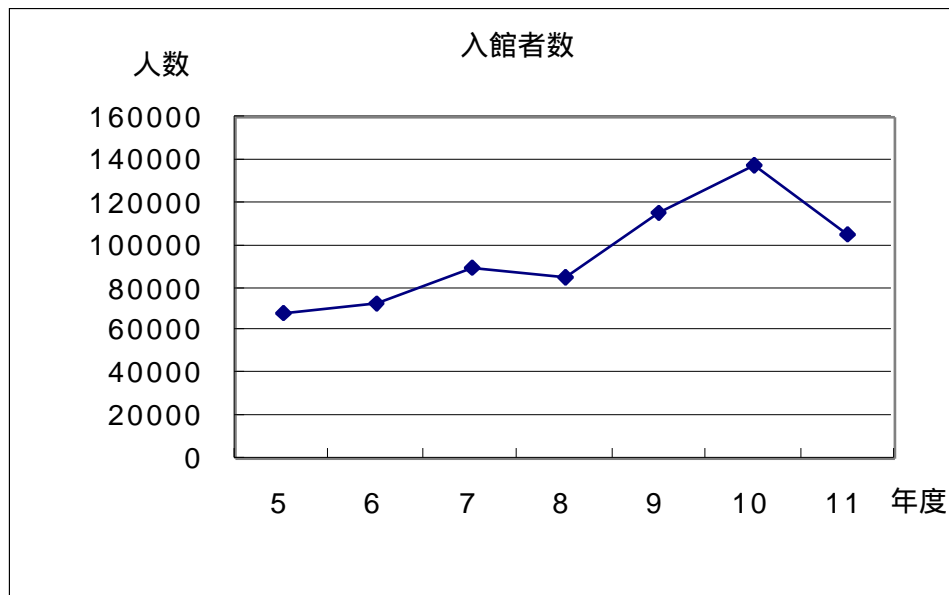
当初は私費での申込だけに限られますが、校費での申込を希望される場合は、各講座等に配付した承認書に御記入のうえ、図書館情報サービス係（内線2109）まで御提出していただいています。承認書が提出された時点から校費申込が可能となっています。なお、「文献複写申込書」での申込も従前どおり受付けています。

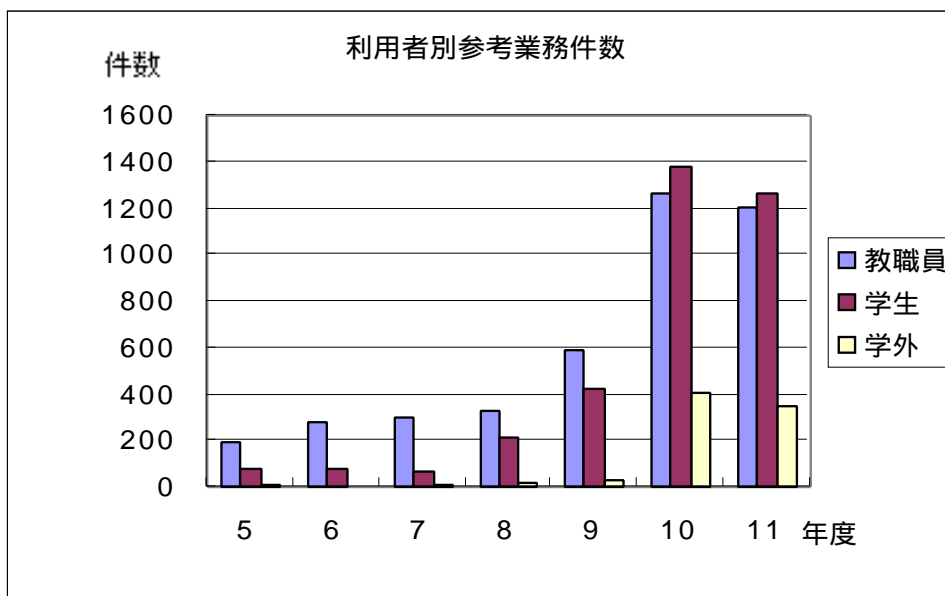
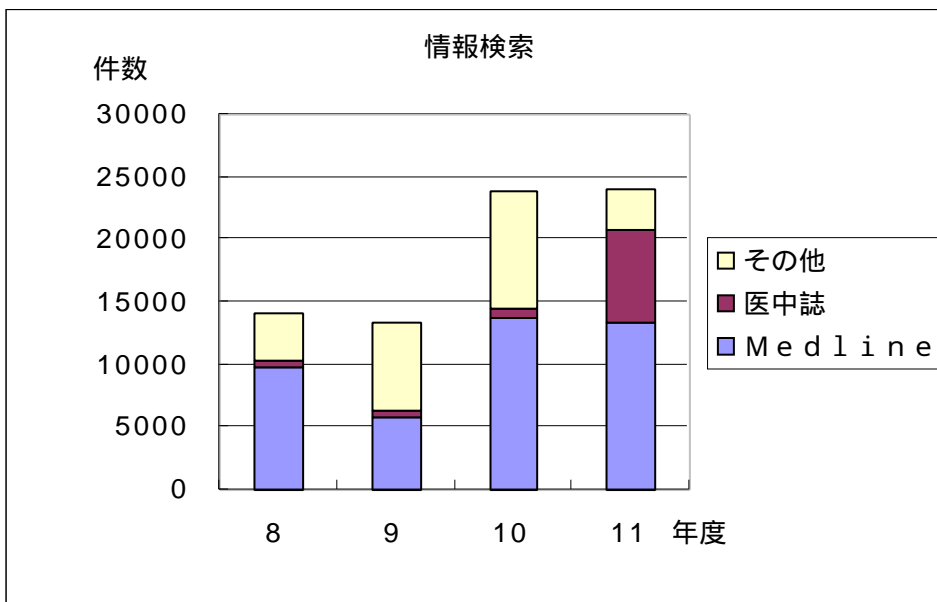
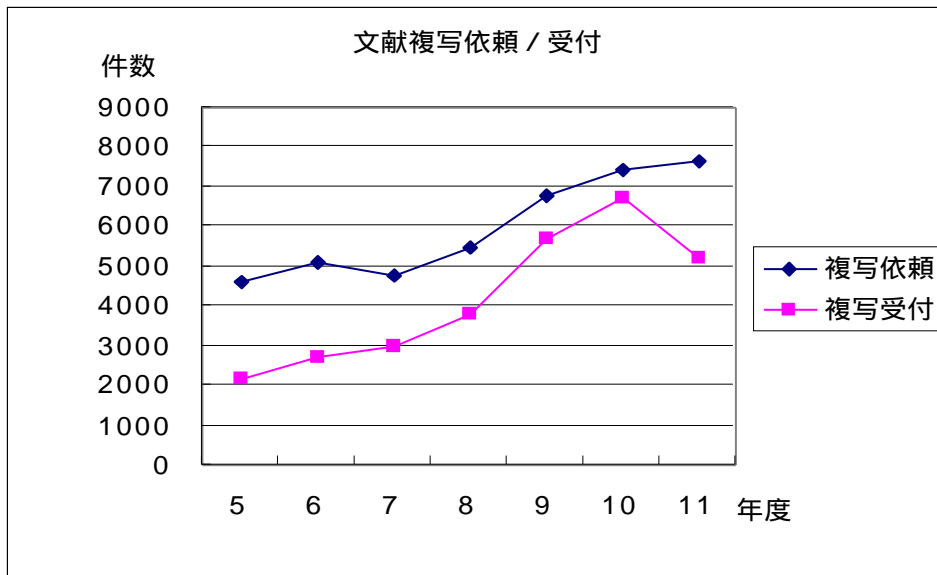
図書館のホームページの教職員のページからリンクしています。

<http://www.yamanashi-med.ac.jp/tosho/kyoushokuin.html>

統計で見る図書館サービス

毎年右肩上がりで増加していた統計が、昨年は横這い又は減少になりました。これには大きく2つの原因が考えられます。1つ目は、電子化が進み図書館に来なくても欲しいものが入手できるようになった事です。情報検索を見ていただくと、総件数が変化していないのにその他が減少し、医学中央雑誌の激増が見られます。これは自主学習室等の整備によりメール(LaMail)がなくなった事と、医学中央雑誌が、教室からでも検索ができるようになった事によります。2つ目として、オンラインジャーナルなどの電子化資料がWebで入手でき、文献複写などの減少が現れてきました。これは今年も続くと思います。また、この統計には出ていませんが気になる現象として、特別利用が3年生以上に拡大されましたが、その利用人数が平成10年度の65%に留まっていて、特に6年生の利用は半分以下に減っています。





編集後記

コンピュータの画面をじっとみる時間が増えてきています。ドライアイを恐れて、できるだけ新緑の木々をみて目を休めるようにしていますが、それでもいつのまにか画面をくいいるようになりまた見えています。確かに便利になってはいますが、やはりチェック作業やちょっと読んでみようということになると、ときには紙に印刷して作業をした方が目にはやさしい感じがします。日常業務に欠かせないコンピュータ業務ですが、適度に視線のポイントを窓の外に向けるなどして目にやさしい使い分けをしたいものです。

(Y. K.)



編集 / 発行	山梨医科大学附属図書館		
<TEL> 直通	273 - 9353	情報管理係	内2108
図書課長	内2106	情報サービス係	内2109
総務係	内2107	カウンター	内2110